

ワークショップ10 障害や病いをもつ医療系学生の語りから教育的支援や合理的配慮について考える

7月31日(土) 10:40~12:10 4チャンネル

WS-10(要旨) 障害や病いをもつ医療系学生の語りから教育的支援や合理的配慮について考える
Considering about reasonable accommodation based on narratives of healthcare students with disabilities

司会：瀬戸山 陽子 (東京医科大学)

【企画の背景】 障害者差別解消法が施行された2016年以降、障害や病いをもちながら高等教育機関で学ぶ学生（障害学生）が急速に増加している。各大学には、多様な学生が学びやすい環境づくりが求められており、医療系においても例外ではない。しかし医療系の教育機関の講義は、「見る」「聞く」という行為が重視されることが多く、さらに必須である臨床実習における障害学生のハードルが高いこともあり、障害学生の受け入れが遅れている。

本ワークショップ企画者は「語りのデータベース」を構築するDIPEX (Database of Individual Patients Experiences) の手法を用い、2020年から障害学生にインタビューを行っており、2021年1月ウェブサイト上に「障害学生の語り」を公開した (<https://www.dipex-j.org/shougai/>)。ウェブサイトには障害をもちながら高等教育機関で学んだ20~40代の女性14名と男性19名の語りがテーマ別に掲載されているが、その中には医学・看護分野で学んだ6名が含まれる。上下肢に障害があり車椅子を使う医学生が臨床実習でどのような経験をして何を感じたのか。聴覚障害を持つ看護学生が授業のディスカッションでどのように支援を受けたのか。体験者の語りから学ぶことは多い。

【目的】 医療系の教育機関で学ぶ障害学生が経験する思いや困難を知り、それに対する教育的な支援や合理的配慮の具体策について考える。

【ワークショップの流れ (90分)】 (1) 「障害学生の語り」のウェブサイトで公開されている医療系学生の実際の語りを視聴し、学生の体験を共有する (2) 少人数グループに分かれ、視聴した映像の中の学生に、それぞれの経験からどのような合理的配慮や教育的な支援が出来るかを討議する。(3) 障害学生を取り巻く社会的な動きや、医療系の教育機関における合理的配慮について、一般的な考え方について共有する。

【想定される参加者】 多様な医療系学生の学びや教育支援、合理的配慮のあり方に関心がある方

ファシリテーター：瀬戸山 陽子 (東京医科大学)
Yoko Setoyama (Tokyo Medical University)

川上 ちひろ (岐阜大学)
Chihiro Kawakami (Gifu University)

青木 昭子 (東京医科大学八王子医療センター)
Akiko Aoki (Tokyo Medical University Hachioji Medical Center)